

大学と企業の橋渡し役

第四期生 前田 修（関西電力株式会社 京都支店）

大学を卒業して20年が過ぎたころ、「ちょっと大学へ行ってみないか？」という会社の上司の言葉がきっかけで、私の1年間の学生生活がスタートしました。おなじ企業に20年も勤めていると、組織に染まるあまり、物事の見方がとても狭くなります。このユニットはそんな私に新たな息吹を吹き込んでくれました。

毎週水曜日に受けた工学・医学に関する講義では、社会人になっても学ぶことがいかに大切かを実感しました。この20年のうちに発生した日本におけるさまざまな問題をどう解決すればいいのか、そのヒントを十分に与えていただきました。とくに、ユニットの発足当時に発生した東日本大震災を機に、工学・医学の連携がこれまで以上に重要になったことは、このユニットの先見性として特筆すべきでしょう。これまでは自治体に頼ってばかりだった住民にみずから動くきっかけを与えただけでなく、平和ボケした日本人がこれからなにをすればいいのかをみずから考えて行動するよう、眠りから目を覚ますことになったのです。

ユニットで学んだことを企業で実践する「橋渡し役」になることが、私のこれからの役割です。それだけでなく、第一期生～第五期生が各現場で活躍することにより、10年後に日本がどうなっているか、そのときに「安寧の都市」は、どんな姿になっているのか、今から楽しみにしています。